

接触場面における日本語母語話者と 中国人日本語学習者による不同意表明

—フェイスの観点から—

王

艶*

1. はじめに

フェイス (face) は人が自分自身に対して欲するポジティブな社会的価値である (Goffman 1967)。Brown & Levinson (1987) によると、社会構成員は誰にでもフェイスがあり、コミュニケーションする際は、フェイスの保持が基本的な欲求であるという。また、「不同意」は相手の意向に反する言語行動で、相手のフェイスを脅かす確率が高いため、適切な言語表現や対人関係などへの配慮が必要とされている。

しかし、このような話し手の配慮は必ず相手に認識・理解されるとは限らない。特に、異なる文化を背景とする場合、時には、ある言語行動への解釈や期待の違いが生じ、誤解を招く可能性もある (西田 2000)。例えば、梶原 (2003) は、留学生の意見の表し方が、日本人には直接的な表現が多く、自己主張が強いという印象を与え、日本語学習者と日本語母語話者間にはコミュニケーション・スタイル上の問題があると指摘している。おそらく、話し手が配慮しながら発言したとしても、相手に伝わらず、悪い印象を与えることもあるのではないかと考えられる。

したがって、このような誤解を解くために、異文化間コミュニケーションにおいて、とりわけ不同意を表明する際に、それぞれどのようにお互いに配慮しているかを明らかにする必要があると考えられる。

本稿は日中接触場面において、それぞれ不同意を表明する際、どのようにお互いのフェイスを配慮するのかを解明することを目的とする。

2. 先行研究

2.1 不同意の定義と分類

王 (2013) は、「不同意」を「相手のある事実情報に対する認識や理解、あるいはある物事に対する意見や評価などについての不賛成、不納得、否定的な意味や含意を持つ言語行為」と定義している。また、木山 (2005a) によると、不同意を「実質的な不同意」と「儀礼的な不同意」という2種類に分けられる。そのうち、実質的な不同意は、不同意の先行発話が話し手の自己卑下や聞き手への褒めではない場合で、儀礼的な不同意は、不同意の先行発話が話し手の自己卑下や聞き手への褒めである場合とされている。つまり、儀礼的な不同意は相手への配慮的な不同意であり、相手を傷付ける行為ではないため、本研究は、「実質的な不同意」のみに注目していく。

2.2 フェイスとフェイス・ワーク

Goffman (1967) は、我々人間は、他者とのインタラクションによって、人々の自己イメージ、つまり、「フェイス」が形成されるという。人間は「自尊心のルールと配慮のルール」に基づいて、自分のフェイスと他者のフェイスを守っている。フェイスが脅かされる場合、フェイスを守る行動、あるいは「フェイス・ワーク (face-work)」が働き始

*お茶の水女子大学・院生

める。ここでの「フェイス・ワーク」というのは、互いのフェイスを保持するため、回避プロセスや修正プロセスを行い、相互的にフェイスを守っていくことである。さらに、Ting-Toomey, S. (1994) は、「フェイス・ワーク」を聞き手のフェイスを保護・促進することに加え、話し手が自身のフェイスを守ったり、あるいは自身や聞き手両方のフェイスを守ったり攻撃したりするということも含めたすべての営みをカバーする概念であると定義している。Brown & Levinson (1987) は Goffman のフェイスの概念を個人の欲求として捉え直し、全ての社会構成員は「ポジティブ・フェイス (positive face, 以下PF)」と「ネガティブ・フェイス (negative face, 以下NF)」という2つの基本欲求があるとしている。ポジティブ・フェイス (PF) は、自己イメージが良く評価されたい、好ましく思われたい、認められたい欲求で、ネガティブ・フェイス (NF) は、縄張り、個人的領分、邪魔されたくない権利、つまり、行動の自由と負担からの自由に対する基本的な欲求である。

2.3 不同意に関する先行研究

日中それぞれの母語場面における不同意研究は、大塚 (2005)、木山 (2005a)、王・松村 (2010) などが挙げられ、日中対照研究には、王 (2013)、趙 (2018) がある。また、接触場面に関する不同意研究は、楊 (2009)、倉田・楊 (2010)、堀田・吉本 (2012)、楊 (2015)、堀田 (2017) などが挙げられる。これらの研究による主な発見は以下のようにまとめられる。

日本語母語話者 (以下JNS) は、より暗示的、間接的に不同意を表明し、積極的に相手のNFに配慮するという傾向が見られる。

中国語母語話者 (以下CNS) と中国人日本語学習者 (以下CJL) は、JNSより断定的な表現が多く使用し、相手を説得する傾向が見られる。また、相手のPFを満足させる表現が多いという。

これらの研究はほとんど話し手が聞き手のフェ

イスへの配慮のみに注目している。しかし、フェイス・ワークの観点では、実際のコミュニケーションにおいて、相手のフェイスのみならず、話し手自身のフェイス、双方のフェイスも絡んでいる。そのため、聞き手のフェイスのほか、話し手自身のフェイス、話し手聞き手双方のフェイスへの配慮はどうかはまだわからない。

3. 研究課題

以上を踏まえ、不同意を表明する際に配慮されるフェイスを明らかにするため、本研究は以下のような研究課題を立てる：

研究課題：初対面場面におけるJNSとCJLが不同意を表明する際、どのようなフェイスが配慮されるか。

- ① 配慮されるフェイスの種類は異なるか。
- ② 配慮されるフェイスの出現頻度は異なるか。

4. 調査方法

本研究は20代前後の女性のJNS、CJLそれぞれ11名を分析対象とする。また、日本語力が会話の進行や研究の結果に影響を与える可能性があるため、日本語能力試験N2に合格し、会話に支障がないかどうかを確認した上、CJLの対象者を決める。

本研究は対象者の変数をコントロールでき、目的に合う補償できる量の会話を得られ、自然会話に近いというメリットがあるロールプレイという調査方法を使用する。「パソコンの選択」「留学生のアルバイト時間制限」「日本のデリバリーサービス」という3つの話題を設定し、対象者に選んでもらい、ペアで討論させ、会話を録音する。また、録音では、調査協力者の意識や考え方を明らかにすることができず、聞き取れないところや聞き間違いところがある可能性もあるため、研究の信頼性を高めるフォローアップ・インタビューも

行う。

データ収集終了後、録音データを文字化にすし、不同意発話を抽出して分析を行う。

以下はロールプレイの話題と収集した会話データの内訳である：

表1 ロールプレイ話題

ロールプレイ① ロールA：MACのほうがいい。 ロールB：Windowsのほうがいい。
ロールプレイ② 日本の留学生のアルバイト時間を週28時間以内に制限することについて。 ロールA：制限があったほうがいい。 ロールB：制限がないほうがいい。
ロールプレイ③ 日本のデリバリーサービスについて。 ロールA：はやく発展するべきだ。 ロールB：事情があるから発展していない。

表2 収集した会話データの内訳

話題	会話数	録音時間
話題①	5	1時間57分31秒
話題②	4	1時間14分52秒
話題③	2	1時間50秒
合計	11	4時間13分13秒

不同意発話の抽出について、本研究は不同意の定義と一致する発話と、不同意の対象となる先行発話を合わせて抽出する。また、相手の1つの先行発話に対し、複数の発話文による連続的な不同意を表す場合もあるため、会話のコンテキストから、先行発話に対する不同意をより広い範囲で抽出する。その後、抽出した発話を分析し、配慮されたフェイスをコーディングし、自分のPF/NFなのか、それとも相手のPF/NFなのか、あるいは両者のPF/NFなのかを数える。

以下は具体的な会話例である。

<会話例1>

C6：そうですね、まあ、なんかあるはあるみた

いですけれども、Windowsよりはちょっとだけましみたいです。(笑)

分析：相手の意見をまず認め、不一致を最小限にした後、自分の意見見解を表明することで、「認められたい」という相手のPFに配慮している。

<会話例2>

J3：えー、やー↑、でもそうじゃないところもあります。あのう、わたしが東京に来る前に住んでいたところは、あのう、東京と同じくらい物価は高いんですけど、その物の値段は高いけど、あの労働賃金は、すごい、本当に900円、たぶん800何円とか、900円とか、そのくらいだったと思います。

分析：自分自身の経験を相手に伝え、相手に「同意されたい」「認められたい」という気持ちを表明し、自分のPFに配慮している。

<会話例3>

J8：(笑) 二つ買うのがいいですね。(笑) どっちのいいところもできる (笑)。

分析：自分と相手の両方の意見を認め、さらに笑いで親近感を示すことで、双方のPFを守っている。

<会話例4>

J3：ただその、1200円ってけっこう高くないですか？

分析：質問の形式で自分の不同意の意思を表すことで、相手に弁解する余地を残し、意見の押し付けを避け、相手のNFに配慮している。

<会話例5>

J8：でも、私やっぱり、iPhoneじゃないので、(笑) そうです、私あの、グーグルピクセルっていうグーグルスマートフォンを使ってるんですけど…

分析：相手の「iPhoneを使ってる人が多い」という意見に対し、自分の属する領域を守り、相手に押し付けられたくない気持ちを表し自分のNFを守っている。

<会話例6>

J1：面白いな、なんか、私1人でなんか、あのうーネットとかで、ちょっと見たんですけど情報を、なんかやっぱ、視点が違うなと思いました。

分析：自分の意見と違うということを暗示的に表明すると同時に、視点の違いというお互いの物事に対する意見や考えの「自由」を守っている。つまり双方のNFに配慮している。

5. 結果及び考察

5.1 結果

分析した結果、JNSとCJLが配慮したフェイスを以下の表のようにまとめられる。

表3 JNSが配慮したフェイス

PFへの配慮			NFへの配慮		
相手	双方	自分	相手	双方	自分
16 25.0%	16 25.0%	6 9.4%	21 32.8%	1 1.6%	4 6.3%
38 (59.4%)			26 (40.6%)		

表4 CJLが配慮したフェイス

PFへの配慮			NFへの配慮		
相手	双方	自分	相手	双方	自分
25 43.9%	13 22.8%	9 15.8%	9 15.8%	0 0.0%	1 1.7%
47 (82.5%)			10 (17.5%)		

まず、配慮したフェイスの種類について、JNSとCJL両方とも相手、自分、双方のフェイスに配慮した。ただし、CJLの中では、双方のNFへの配慮が見られなかった。

配慮したフェイスのそれぞれの出現頻度について、全体的にみると、JNSもCJLもPFへの配慮が最も多い（JNS：59.4%、CJL：82.5%）。項目ごとに見てみると、JNSは相手のNF（32.8%）、CJLは相手のPF（43.9%）への配慮が最も多い。

JNSはPFとNFへの配慮が比較的均衡であるが（59.4%：40.6%）、CJLはPFへの配慮が極めて多い（82.5%：17.5%）。また、JNSもCJLも相手のフェイス>双方のフェイス>自分のフェイスという頻度の順でフェイスを配慮している。

5.2 考察

JNSもCJLも相手のフェイスだけでなく、自身のフェイス、双方のフェイスにも配慮している。ただし、これらの出現頻度を見てみると、より良いコミュニケーションのため、自分のフェイスより、相手のフェイスを優先に考えるのが一般的であると考えられる。

JNSとCJL両方とも、積極的に互いのPFを守っていることが観察された。それは、不同意は相手のPFを脅かす確率が高いため、より多くの表現を使い相手のPFを補償するのではないかと考えられる。フォローアップ・インタビューによって確認された結果とも一致しており、ほとんどのJNSとCJLは、ロールプレイ会話をする際、会話が順調に進み、気まずくならないように、注意を払っていた。それに加え、言語行動のみならず、非言語行動の面でも、声の明るさ、笑い、イントネーションなどの気遣いも見受けられた。

また、CJLは今までの研究と同じようにPFを重視しているが、よくNFを重視すると言われていたJNSは（熊谷 2013）、実際の不同意の会話の中では、PFも非常に重視していることがわかった。

6. 結論

本稿では、フェイスの観点から、接触場面における日中大学生が不同意を表明する際、お互いのフェイスへの配慮状況を分析した。今まで、相手のフェイスへの配慮に注目する研究が多くなされてきたが、実際のコミュニケーションにおいて、今回の不同意表明の研究のように、相手のフェイスのみならず、自分のフェイス、双方のフェイス

も関わっていることがさらに証明された。

また、CJLはよく直接的に不同意を表明しがちであるため、フェイスへの配慮が不足しているように見えてしまうが、今回の分析の結果からは、JNSと違いがあるが、積極的にお互いのフェイスを配慮していることが見てとれる。このように、会話に関わるフェイス・ワークが解明されると、異文化間コミュニケーション上の誤解の解消と相互理解の促進に役に立つのではないかと考えられる。

7. 今後の課題

今回の研究は、JNSとCJLとの接触場面でしかも日本語での分析だったが、日中それぞれの母語場面とどのような違いがあるか、CJLは第二言語環境においてどの程度日本語の影響、母語・母文化の影響を受けたかについて解明していないため、それぞれの母語場面と比較し、考察する必要があると考えられる。

参考文献

- 王萌 (2013) 『日本人と中国人の不同意表明－ホライトネスの観点から－』花書院
- 大塚淳子 (2005) 「不同意の表明－日本人大学生の場合－」『日本語・日本文化』31.81-91.
- 梶原綾乃 (2003) 「留学生と日本人との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育』117. 93-102.
- 木山幸子 (2005a) 「日本語の雑談における不同意の様相－会話教育の示唆－」『言語情報学研究報告』6.165-182.
- 熊谷智子 (2013) 「日本語の「謝罪」をめぐるフェイスワーク」『東京女子大学比較文化研究所紀要』74.21-36.
- 倉田芳弥・楊虹 (2010) 「討論における中国人学習者と日本語母語話者の不同意表明の仕方－構成要素の観点から－」『言語文化と日本語教育』39.158-161.
- 西田ひろ子 (2000) 『人間の行動原理に基づいた異文化間コミュニケーション』創元社
- 堀田智子 (2017) 「中国人日本語学習者の『不同意」

行為－ストラテジーの使用における語用論的転移の可能性－」『国際文化研究』23.95-106.

堀田智子・吉本啓 (2012) 「中国人日本語学習者の『不同意』行動－談話の一考察－」『日本認知科学学会大会発表論文集』29.2-14.

楊虹 (2015) 「話し合いにおける不同意表明発話のモダリティ－中日接触場面と中国語・日本語母語場面の比較から－」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』46.87-102.

楊昉 (2009) 「意見の不一致における類型と調整ストラテジー－中国語母語場面と日中接触場面の事例分析－」『多文化接触場面の言語行動と言語管理』千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 218.65-85.

Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. 田中典子 (監訳) (2011) 『ポライトネス言語使用における、ある普遍現象』東京：研究社出版

Goffman, E. (1967) *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. New York: Pantheon. 浅野敏夫 訳 (2002) 『儀礼としての相互行為－対面行動の社会学新訳版－』叢書・ユニベルシタス 198. 法政大学出版社

Ting-Toomey, S. (1994) *Face and facework: An introduction*. In Ting-Toomey, S. (ed.) *The challenge of facework: Cross-cultural and interpersonal issues*. Albany, NY: State University of New York Press, 287-305.